編集後記

本号が発刊されるころには長い梅雨にはいっているでしょうか。今年も慰霊の日が近づいてきました。アフガニスタンやイラクなど内戦状態が続き、近隣では北朝鮮ミサイル問題など不安定な国際情勢です。梅雨がやがて終わり夏が来るように、過去を振り返りながら平和を祈りたいと思います。

さて、今月号の表紙は梅雨空を吹き飛ばすような嶺井美奈子先生の早朝の海です。筆者は船に乗るのは嫌いですが、青い海を往来する船は心を和ませてくれます。お楽しみ下さい。

今月号の最も大きなトピックスは沖縄県医師会平成21年度研修医歓迎レセプションです。これまで琉球大学を中心とするRyuMIC、県立病院を中心とする研修グループ、病院群で構成される群星などの研修システムごとの歓迎会がおこなわれてきましたが、残念ながら各研修システム間で交流は活発とは言い難い状態でした。沖縄県では毎年140名もの研修医を受け入れていますが、筆者もこの状況を寂しく思っていました。今回、各研修グループが初めて一堂に会したことは画期的で、 200名を超える研修医、指導医が参加したことからみてもこのような交流会が待たれていたのだと思います。交流を深めながら切磋琢磨し、ここ沖縄の地で素晴らしい医師として成長されることを期待しています。

その他のトピックスとして第120回日本医師会定例代議員会報告、第188回沖縄県医師会定例代議員会報告を挙げています。医師会の方向性や医師会員の会費がどのように使われているのかご一読いただきたいと思います。

生涯教育は真栄城修二先生の早期関節リウマチの診断・治療についてです。学生時代に習った診断・治療法が大きく変わっていることに驚かされました。プライマリ・ケアコーナーは藤田次郎教授による喘息のお話です。喘息の治療は有効な吸入ステロイド薬が普及して、重症例が減っていると思っていましたが、沖縄県では喘息死亡例数は減っているものの死亡率が全国平均よりかなり高いようです。喘息死の診断に疑問もあるようですが、適切な治療が行われていないことが大きいようです。喘息死0、喘息発作による救急受診0が達成されるかどうかは別にして、急死するような喘息発作は何とか減らしてゆきたいものです。

若手コーナーは豊見城中央病院からの投稿です。指導医の比嘉先生はよい医師には広い意味でのコミュニケーション能力が大切と説いておられます。この能力は卒業して医師になったからといって身につくものではありません。大学教育でも、OSCEなど診察技法について教育の改善を図ってきましたが、さらにこれまで以上に取り上げていく必要があるように筆者も感じました。

好評の本の紹介コーナーは石川広報委員から“他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス”と“誰にも書かれたくなかった戦後史”の紹介です。終戦から随分時が経ち、戦争を忘れがちになりますが、過去を振り返り、また明日に継げる意味でも読んでみたい本です。

今月の随筆は中頭病院の安里浩亮先生からです。内科医と外科医の信頼関係、相互理解が患者の利益となる典型で、現在の臓器別診療につながるお話です。興味深く読ませていただきました。

すべてをご紹介できませんが、ご投稿いただきました会員の皆様ありがとうございました。

広報委員会では会員の先生方にお願いして医師会報の記事に対するアンケートを取っています。特に人気のあるのはインタビューコーナーや随筆コーナーのようです。報告も意外に（？）読まれているようです。広報委員会では充実した医師会雑誌を目指して、会員のニーズに合うように努力しています。ご意見がございましたら是非ご一報ください。

広報委員　鈴木 幹男